

【尼寺】あまでら

あまり話題に上らないことのようにですが、日本で最初に出家した人は尼・すなわち女性だったようです。

『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』は当時の様子を『日本書紀』以上に詳しく伝えています。それによれば、飛鳥時代、蘇我氏と物部氏との激しい崇仏・廃仏論争のさなか、渡来人にして蘇我氏のブレーンであった司馬達等の娘 斯末売(しまめ)が若くして高麗の渡来僧恵便・法明に師事して出家し善信尼と名のりました。(敏達天皇十三年 584)

恵善尼と禅蔵尼の二人の娘もこれに続き、彼女ら三人が日本における尼僧の始まりとなったわけです。

善信尼は法隆寺金堂本尊釈迦三尊像を造った鞍作止利の叔母に当たります。

彼女らは廃仏論者の物部守屋の襲撃にあい、捕らえられて鞭打ちの刑にあうなど苦難の道を歩みます。しかし、百済に渡り正式に受戒して帰国、桜井寺にて多くの尼を育て生涯を仏の道に捧げました。

この桜井寺は桜井道場とも記され、伽藍の整った寺院ではなく、当初は屋敷の一部を利用、あるいは増築しただけの草堂であったと想像されます。これが日本最古の尼寺なのです。

それにしても日本初の僧侶はなぜ女性だったのでしょうか。

伝来当初の仏教は、伝統的な祖先崇拝の新たな儀礼方法として受け入れられました。そのため尼僧に祖霊と交信するシャーマン的能力を期待したのではないのでしょうか。現代でも霊媒師・占師など霊に関わる仕事は女性が多いようです。

古代社会では、男性が地上的権力を、女性が神秘的権威を持っていました。

言い方を変えるならば男性は尊敬、女性は崇拝の対象となる性なのです。

時代が移り奈良時代になると、国家仏教の時代となります。

強大な中央集権国家こそ世に平安をもたらすと考えた基調は、仏教界においても中央集権的組織を理想としました。その政策として、聖武天皇は各国に国分寺・国分尼寺の造営を命じたのです。全国の国分寺と国分尼寺は国府(役所)の近くに建てられ、両寺は隣接を避けながらも、鐘の音が聞こえる距離を保って造営されたということです。

国府の建物と国分寺・国分尼寺の伽藍は各国の建造物の中で圧倒的な規模と様式美を有し、大和政権の権威を示していたはずで

そして各国の国分寺総本山として東大寺が、国分尼寺の総本山として法華寺が奈良の都に造営されました。

法華寺は発願者でもある光明皇后(聖武天皇后・藤原不比等娘)の屋敷の地を寺にしたもので、奈良時代を代表する尼寺であることは言うまでもありません。

法華寺は現代も人気のある寺で、本尊の十一面観音像は平安時代初期の傑作として知られています。光明皇后の御影という伝承のある一木造です。

<http://www.bell.jp/pancho/travel/nisinokyo/hokkeji.htm>

・法華寺本尊十一面観音

会津八一

ふちはらの おほき きさきを うつしみに あひみる ごとく あかき くちびる

時代を移し、中世の尼寺といえは大原の寂光院が思い浮かびます。

・ほととぎす 治承寿永の御国母 三十にして経よます寺 与謝野晶子

御国母[おんこくも]とは平清盛の娘、安徳天皇の母、建礼門院(徳子)のことです。

平家盛衰の生き証人である彼女は壇の浦の戦いで捕らえられ、無常の世の果てに出家し、京都大原の寂光院にて余生をおくりました。

『平家物語』によれば、建礼門院の最期は阿弥陀仏の手につながれた五色の糸を握りながら念仏を唱え、大納言佐の局(安徳天皇乳母)、阿波内侍(信西娘)にみとられながら西の彼方へ旅立ったそうです。

「尼寺」の銘に寂光院を思い浮かべるとき、無常の侘しさが茶の湯の趣を深めてくれることでしょう。

それは侘びの母体が無常観であることの証でもあります。

「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり…」で始まる『平家物語』は源平盛衰の様を通して世の無常を描き、建礼門院の極楽往生までを綴って筆を置いています。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~